



5月号

ひだまり

今月のエッセー

近くにいるからこそ

四月に上京して早二ヶ月が経ちました。東日本大震災の時アメリカに留学していた友人が先日帰国した際、一緒に食事する機会がありました。当手を振り返って彼はこんな話をしてくれました。

震災の一報を聞いて、居ても立ってもいられなくなつた私の友人は、仲間と留学先の学校の門の前で募金活動をしました。すると、真っ先に駆け寄ってくれたのはアメリカ人のお婆さん。しわくちゃのお札を募金箱に入れると、涙を流しながら「日本の皆さんのために祈っています」と言ってくださったそうです。お婆さんを皮切りに地元住民の皆さんが列を

成して温かい言葉とともに手持ちのお金を募金されたそうです。

そんな時に友人達の目の前を日本人留学生が通りかかりました。友人が駆け寄り募金を求めると彼はげんごんな顔をして立ち去りました。その後も日本人の募金者はかなり少なかったそうです。

私達は、近しい距離にいる人々に対しては、気負わずに普段の飾らない自分で接することができます。しかし、身近な間柄だからこそ時に相手に対しての思いやりや敬意を蔑ろにしてしまいがちです。

彼の話は、熊本の被災した人々に本当の意味で向き合えていない、只の傍観者としての自分に気づかせてくれました。

四月十四日以降、熊本県で発生した地震は未だ予断を許さない状況です。そんな中で、五年前と同じように日本のために地球の反対側から祈り、励まし、手を差し伸べてくれる人たちが沢山います。

近くにいる私達だからこそできることを熊本の人達にしていきたい、そう思いました。

◆本田真大

仏教のことば

「歡喜」

私は、岩手県の歡喜寺というお寺で生まれ育ちました。皆さんは「歡喜」という言葉にどのような印象をお持ちでしょうか。

読んで字のごとく「歡」も「喜」も、よろこぶという意味です。仏教でいう「歡喜」とは、仏の教えを聞き、慈悲の心をもって衆生を救った時に心の中より湧き上がってきて思わず躍りたくなるような喜びを言います。つまり、ただ喜ばしいのではなく、深い感動をとめない、身の震えるような喜びを示すのです。

日本では、観音菩薩様や地藏菩薩様など、菩薩様をよく信仰している



と思います。菩薩様は十段階の修行を積んで仏になると言われていますが、その第一段階を「歡喜地」と呼びます。仏の教えを知り、その教えを人々に広めた時の喜びを菩薩の第一歩としているのです。

私たちが「歡喜」で思い出すのは、ベートヴェンの交響曲第九番第四楽章「歡喜の歌」ではないでしょうか。冒頭の「おお友よ、もつと歡喜に満ち溢れる楽しい歌を歌おうではないか」という歌詞は、ベートヴェン自らが考えたそうです。古今東西の誰もが「もつと歡喜を」と、願っているのですね。

◆深澤亮道

編集後記

北宋時代の山水画家である郭熙は、画論『臥遊録』の中で、夏の山を次の様に綴っています。「夏山蒼翠にして滴るが如し」。この「山滴る」は俳句の季語にもなっており、水が滴るほどに緑が瑞々しい山の様子を描写しています。

この季節、木の下や草むらを歩くと瑞々しく緑が香ります。香りは記憶と結びつき易いのか、緑の香りに私は幼稚園時代、遠足で歩いた山道の情景を思い出します。とはいってもこの今こそが最新の時。今の立場として最後の夏が、後に振り返っていい時であることを祈りながら、私なりに精進しようと思っております。

◆田代浩潤

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

法のお話



伊藤正法
二年度

『慈しみの言葉』

この世界にはたくさん「言葉」があります。その「言葉」を普段、私たちは何気なく使い、思っていること、感じていることを互いに伝え合い、意思の疎通を図っています。いまさら言うまでもなく、言葉はとても便利ですが、私たちはその使い方によく注意しなければなりません。

しかし、慌ただしく日常を過ごしていると、つい配慮を欠いてしまい、人に粗雑な言葉を投げかけてしまうことが少なからずあるのではないのでしょうか。
仏教の言葉に「口中の斧」というものがあります。簡単に解釈しますと「言葉も使い方によっては相手や自分を傷つけてしまう。故に自分を戒めないといけない。」

ということですが。

決して相手を傷つけるつもりがなくても、何かの拍子に意図せず傷つけてしまっている場合があります。そうならないためにも、日頃から言葉の使い方には注意していきたいものです。そのために必要なのは、「相手を思い、労わる心」ではないのでしょうか。

「修証義」というお経の中に、次の一節があります。

「慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり…」

「人々に対してまるで赤ちゃんをみるような気持ちを抱いて、言葉をかけるのが慈しみの言葉（愛語）です。」

ただ単に言葉をかけるだけではなく、まず相手のことを無条件に慈しむという心がけが必要だと説いているのです。実は、私は以前にこのような体験をしたことがあります。

混雑している電車の中で、自分自身で決めている「自分ルール」に従って、お年

寄りの方に席を譲ろうとした際の出来事です。私から見てその人は疲れているように見えたので、ぜひとも座って貰いたいと思いつつ「どうぞ」と譲ったのです。しかし、その方は、「ありがとう、お気持ちだけで…」とお礼の言葉だけで、そのまま降りられる駅まで立っていたのです。

当時の私には座らないその方の気持ちが全く理解できませんでした。むしろ、「自分ルール」を履行して「いいこと」をしたはず。しかし、時を経た今となっては当時を振り返ってみれば、私の中にあつたのは、一見すると相手を思い遣っているようで、実は「自分がこうしてやりたい」という自分勝手な考えだったのだと感じます。恥ずかしいことですが、「相手を想う気持ち」とはとても言えないものでした。

「相手を思い、労わる心」。

人と共に暮らす私たちにとって、この心は全ての行いの土台に据えておきたいもの。しかし、あまりに当然として使っている言葉に関しては、つい忘れてしまいがちです。

その時々はこの経験を思い出し、自身を戒め、修行を続けていきたいものです。

仏教の行事

『降誕会』

ごうたんえ



今から約二千六百年前の四月八日、ネパール南部に位置するルンビニ園という場所でお釈迦様はお生まれになりました。

お釈迦様がお生まれになるやいなや、天から竜がやってきて、甘露（蜜のように甘い露）の雨が降り注いだという逸話が残っており、その誕生を盛大に祝ったと伝えられています。

日本では現在、お生まれになった四月八日に「降誕会」と称して、お祝いの意味を込めて行事を行っております。

左にある写真のようなお堂（花御堂）を置き、お釈迦様の像に甘茶をそそぐようになったのが江戸時代。また、「花祭り」と呼ぶようになったのは、明治時代以降とされております。

花祭りで配られる甘茶を飲むと病気に罹らないとされ、その習慣が現在も受け継がれているのです。



田中仁秀

ひだまり書房



『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』
著 竹内整一

私がこの本を読んだのは、知り合いとの電話の切り際、相手が「じゃあ、さようなら」と言ったことがきっかけでした。その言葉を久しぶりに聞き、

その音としての響きが滑らかで美しく感じられ、同時に「さようなら」という言葉の起源を知りたくなったのです。

「さようなら」は言い換えると「そのようであるならば」です。つまり、「〇〇であるならば××だ」と言う具合に、前の言葉（これまで）を受け止め、その後（＝未来）へ繋げる役割があります。

これは日本人の特有の物の見方や死生観に由来するものだと思います。「さようなら」は淋しいものですが、「これから」へのかけ橋というポジティブな役割もあるのです。

田代浩潤